

# かささぎ通信 第110号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2022年 1月 14日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二二年十二月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』(1932.3)の「目ぐすり」と『少国民文芸選』かさんぎ物語』(1942.8) (帝国教育会出版部)の「狐の目薬」の読み比べをしました。

『赤い鳥』(1932.3)の「目ぐすり」は刈谷に伝わる「恩田の初連」という昔話を元にして森三郎が作った童話です。「目ぐすり」は森三郎童話紙芝居第一作に選んだ作品なので、会ではこれまでに何回も読んできました。前回読んだ時の報告は「かささぎ通信」第74号に掲載しています。

今回『赤い鳥』所収作(A)と帝国教育会出版部『かさんぎ物語』所収作(T)を読み比べてみると、お酒を飲んでいい機嫌になった七右衛門じいさんが、狐に化かされて竹藪の中の藁屋に誘導されるまでの描写がずいぶん違うことに気づきました。

(A)町へはいる途中には、昼でも不気味な竹やぶ道がありました。よく人をばかすので、夜になると、だれでもこはがつて、遠くをまはつて通りました。

しかし、七右衛門ぢいさんは、お酒の元気で、そんなことにはおこまひなく、平気でそのやぶみちへはいりました。すると、向うの方の木立の間から、ちらりと人家のあかりらしいものがみえました。

(T)町へ入る手前の昼でも暗い竹藪の中の道へかゝりますと、向うに家の灯が見えます。

参加者からは(A)に比べて(T)は省略が多すぎるという声が多く上がりました。(A)は「七右衛門さんは狐に化かされないかな」と子どもたちが緊張感をもって話に入っているが、(T)の方は話の筋を主にしている、臨場感に欠けるといった感想も出ました。

この場面以外にも(T)は省略が多かったので、「一九四二(昭和七)年という時局柄、紙不足ということは考えられないか」という疑問の声も出されました。スペース分を含めると(A)は全体で五〇三九字、(T)

は三五七〇字で、約三〇パーセントも減少しています。

国立国会図書館の第一三五回常設展示「戦時下の出版」で戦時下の出版体制についてみると、「昭和一六年六月二一日、出版用紙配給割当規定施行。これにより、出版事業者が事前に提出した出版企画届を日本出版文化協会が査定の上、用紙を配給する制度が確立した」とあります。確かに帝国教育会出版部発行『かさんぎ物語』の奥付には「出文協認ア二〇〇六二」の承認番号と、配給元「日本出版配給株式会社」の名前が刷り込まれています。『赤い鳥』版の表現に比べて「帝国教育会出版部」版に省略が多いのは、文章表現上の無駄を省くという配慮に加えて紙面の制限ということもあつたのかもしれない。

「帝国教育会出版部」版で一番大きな省略は、七右衛門さんのお陰で目が治った狐の母娘は、御礼としてたけのこや花、栗や松茸を七右衛門さんの家の戸口に置いていき、七右衛門さんも時々油で揚げた菓子やがんどきなどを竹藪の藁屋のあつた辺りに置いてきてやつたという、狐と人間の無言の交流の場面がすっかり無くなっていることです。その分量は五二九字分で『赤い鳥』版全体の十パーセント強にもなります。

森三郎が『赤い鳥』にこの作品を発表する二か月前、一九三二年一月号に新美南吉の「ごん狐」が掲載されています。隣り合う三河と知多の狐の話です。「ごん狐」が発表された時には三郎の「目ぐすり」は既に校了になっていて、影響関係はないはずですが、しかし三郎は一九四二年に発表した「狐の目薬」では、「ごん狐」のごんが栗や松茸を兵十に届ける場面との類似を避けて省略したのではないかと想像もできます。この部分は子狐を町のいろいろな人の姿に化けさせて目薬を買いに行かせるという、三郎らしい滑稽味とほのぼのとした優しさがあふれている箇所なので、省略は残念な気がしました。

次回予定 二〇二二年二月十一日(金)午後一時半~三時半

「わらび餅」の読み比べ(『赤い鳥』(1932.7)と『かさんぎ物語』(1942.8) 帝国教育会出版部)